



Title	20世紀初頭の英国における日本製輸出用キモノの流通 と日英業者の相互交渉について
Author(s)	サワシュ, 晃子
Citation	デザイン理論. 2015, 65, p. 15-29
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56322
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

20世紀初頭の英国における日本製輸出用キモノの流通 と日英業者の相互交渉について

サワシュ 晃 子

キーワード
ジャポニスム, キモノ, ファッション
Japonisme, Kimono, Fashion

1. はじめに
2. 英国の百貨店での取り扱い
 - 2-1. 東洋製品専門店から百貨店へのキモノの広がり
 - 2-2. Harrods で販売されたキモノ
 - 2-3. 英国の美術館・博物館に現存するキモノ
3. 高島屋のキモノと対英貿易
 - 3-1. 高島屋ロンドン出張所
 - 3-2. 「外人向着物」と輸出カタログについて
4. キモノの色彩をめぐる日英交渉
5. まとめ

1. はじめに

本稿は、日本製輸出用キモノの英国における流通と、その過程でキモノの色がどのように変化したのかを明らかにするものである¹。キモノは、コルセットの害悪が叫ばれ、衣服のシルエットが大きく変化した20世紀初頭の欧米のファッションの影響源の一つと考えられることから、その重要性は言うまでもない。19世紀後半から、着物は欧米の画家の作品にしばしば描かれてきた。モネの“La Japonaise” (1876) では深紅、ロセッティの“The Beloved” (“The Bride”) (1865-66) では深緑、ホイットマンの“The Princess from the Land of Porcelain” (1863-65) では黒とピンクの着物が描かれている。このことは、これらの色のキモノが実際に欧米で人気があったということを意味しているのだろうか。

ファッションの分野におけるジャポニスムは、深井晃子氏『ジャポニスムインファッション海を渡ったキモノ』で初めて明らかにされた²。本書では、キモノの流行と現地のデザイナーへの影響を、主にフランスの事例を中心として考察している。一方、当時日本の最大の貿易相手国であった英国には、キモノを含む大量の日本製輸出工芸品が渡っており、その影響はフランスと比べても意義深いものであった。とりわけ、英国では19世紀後半から、唯美主義者やレイシヨナルドレス協会によって、コルセットから身体を解放する必要性が提唱されていた。ここに、当時海外ではゆったりした衣服と認識されていた日本の着物を受け入れる土壌があっ

本稿は219回研究例会（2014年9月28日、於：大阪工業大学うめきたナレッジセンター）での発表に基づく。

たことは注目すべきである。

しかしながらこれまで、英国のファッションにおける日本の影響は、米今由希子氏や Elizabeth Kramer 氏のような、19世紀末までが対象の研究の中で捉えられるにとどまってきた³。そのため、英国内でキモノ販売が拡大し、キモノが一部のコレクターだけでなく、一般にまで浸透した20世紀初頭の大流行とその影響については見落とされてきた。

とはいえ、周防珠実氏が明らかにした、東洋製品販売の大手 Liberty 商会による20世紀初頭のキモノ販売はすでに知られている⁴。また、先行研究で一部の現存品やその欧米での人気で紹介されたり、キモノを着た女性表象が扱われたりすることはあった⁵。しかし、これまでこのように断片的に言及されてきたものの、それらが実際にどのように流通し、そこに誰がどう関わっていたのかという問題に関しては、実際ほとんど明らかになっていない。近年、林忠正や執行弘道、起立工商会社や山中商会など、日本の絵画などの美術品や陶磁器などの工芸品を輸出した美術商の活動に関して議論されてきた⁶。しかし、同じように刺繍製品や絹製品を製作・輸出した高島屋などの、キモノ輸出の重要性は全く見落とされていると言っている。

本稿では、20世紀初頭の英国ファッション産業におけるキモノの広がり、それを一般の消費者がどのような形で手に入れることができたのか、また、それらはどのようにして日本から英国にもたらされたのかを明らかにする。同時に、その流通・消費の過程でキモノの色がどう変化していったのかという問題も考えたい。これらを、英国の百貨店と日本の高島屋に注目し、日英双方の資料を突き合わせて検証することで、20世紀のキモノブームのもつ意味と、その中で日英の業者が果たした役割の一端を浮き彫りにしたい。

2. 英国の百貨店での取り扱い

2-1. 東洋製品専門店から百貨店へのキモノの広がり

英国でキモノが流行していたという報告は、当時の日本人旅行者の記録に断片的に残されている。例えば、桜井鷗村は「キモノ」あるいは「キモナ」が「上着ともなり、外套ともなり、これが近年引つづいての大流行」であると、また田中湄人は「所謂キモノはウエスト、エンドは勿論、市内の所々にて見本棚に飾れるを認む」と報告している⁷。しかしながら、実態についてはこれまで明らかにされてこなかった。一体これらのキモノは、英国内においてどのような形で、どの程度の規模で流通していたのだろうか。

先述の通り、20世紀に英国でキモノを販売していた Liberty 商会が当時、特にファッションの分野におけるジャポニズムを牽引した存在の一つであったことは間違いない。しかし20世紀初頭、キモノの取扱いは、すでに Liberty 商会だけでなく、様々な百貨店や商店に広がっていた。当時の英国内の業者向け新聞 *Drapers' Record* を見ると、現地の東洋製品専門店の広告を中心に、キモノの宣伝が散見される。1909年9月18日掲載の Charles Weil 商会の

広告では、本商会の Blanchard 氏の日本と中国への買い付け旅行が報告され、直輸入と思しき「綿地のキモノ」と「絹地のキモノ」が紹介されている。同様に、Singleton Benda 商会、E. Evison 商会、Foster, Porter 商会などでも、様々な種類のキモノの取り扱いが宣伝され、専門業者によってかなりの量が英国内で販売されていたことがわかる⁸。

さらに同年、西ロンドンの百貨店 Whiteleys でも、ウィンドウが多くの子モノで飾られていた⁹【図1】。1914年4月の同店総合カタログでも、引き続き様々な種類のキモノが扱われており、Whiteleys にとって、キモノは当時目玉商品の一つとなっていたことがわかる【図2】。日英博覧会後の事務報告には「倫敦ノ有名ナル大雜貨店「ホワイトレー」商店飲食部ヨリ醬油ニ関シ種々照会アリシヲ以テ本邦ノ製造家ヲ紹介シテ直接交渉ヲ為サシメ」たとの記述があり、Whiteleys が日本側業者との直接取引によって製品を仕入れていた可能性を示唆している。

さらに、キモノ販売はこの頃、Whiteleys のような大手百貨店以外にも広がっていた。ロンドン中心部で1878年から1972年まで営業し、通信販売でも成功をおさめていた百貨店 Gamage's の、1913年のクリスマスカタログを見てみよう。誌面では、日本製の焼き物・銀器・漆器が中心的に扱われ、カガ、イマリ、サツマ、カメイドヤキといった名前が見える。それらに混じって、「ベルト付き日本製シルクキモノ、イブニングウェア用」、「現地の最高級手刺繍入りキモノ、年代物と現代物」、「ベルト付き日本現地のコットン製プリント地キモノ、バスローブや室内着用」などが紹介されている。一方、陸海軍の軍人団体によって1871年に設立された Army and Navy Co-operative Society 直営店の1910年3月15日のカタログでも、「日本製シルクキモノガウン」、「日本製シルクキモノジャケット」が紹介されている¹⁰。これらのことから、キモノは当時、少なくともロンドンでは東洋製品専門店から百貨店に至るまで様々な所で販売されており、容易に入手することができたと考えられる。

それでは、このようにキモノ販売が一般向けに拡大したのは、いつ頃なのだろうか。ロンドンの大手東洋製品商 I. Marians 商会（後の Priest, Marians 商会）の1893年春号カタログを見ると、団扇や屏風、陶器などの品が中心で、キモノは全く取り扱いがない。カタログに掲載された店舗内



【図1】 Whiteleys の1909年 ウィンドウディスプレイ ©The British Library Board (LON LD167)



【図2】 1914年4月 Whiteleys 総合カタログ ©City of Westminster Archives Centre

写真では、同商会の西洋人女性店員がキモノらしきものを着ている様子が確認できることから、この時点ではキモノは英国内に存在はしていたものの、特別な人物が着るに留まっていたことが推測できる。

ところが、1909年9月8日の *Drapers' Record* 掲載広告では、本商会の Walter Priest 氏の日本への買い付け旅行が報告され、その結果「モダンな高級品の、刺繍入り縮緬地キモノとジャケット」が販売されている。また、1910年3月5日掲載の広告には、後述の高島屋輸出カタログのマンドリンコートに酷似した「日本製刺繍入りキモノ」がイラスト入りで宣伝されている【図3】。英国での日本製品販売の中心的存在の一つであった同商會を指標とするならば、英国で一般向けのキモノ販売が拡大したのは、20世紀になってからのことだったと考えられる¹¹。「大日本外国貿易年表」の統計では、キモノにあたりと考えられる「絹製寝衣」が項目として立てられるのは1902年以降のことであり、それ以降1920年までの間、英国には年間5万枚から最大で約45万枚の「絹製寝衣」が輸出されている。さらに、1904年の高島屋の雑誌『新衣裳』でも「キモノ」の輸出は三四年前よりメッキリ盛大になって来た」と記されており、これらのことから、やはり一般へのキモノ販売は20世紀初頭に広がったと考えて間違いないであろう。

それでは、キモノは現地でどのようにプロモーションされたのか、Liberty 商会と並ぶ英国の主要百貨店の一つであった Harrods の事例で検証したい。



【図3】 Priest, Marians 商会広告
©The British Library Board (LON LD167)

2-2. Harrods で販売されたキモノ

1834年創業の Harrods は、現在もロンドンを代表する高級百貨店の一つとして世界中に知られている。当時アッパーミドルクラス以上を中心的顧客とした Harrods には、1895年頃から1921年10月まで Oriental Department が存在し、屏風やうちわなど様々な日本の品とともにキモノが販売されていた。20世紀に入ってから約20年間に出版された Harrods のカタログを見ると、日本製のドレッシングガウンとキモノが継続して販売されていることがわかる。1907年になると、カタログの目次にも Kimonos という項目が登場し、キモノがこの頃すでに Harrods にとって重要な商品の一つになっていたことがわかる。先の田中湄人が見たキモノの飾られた「ウエスト、エンド」の「見本棚」とは、West End と呼ばれる地区に位置する Harrods の陳列棚のことを指している可能性が非常に高い。

1909年の総合カタログを見ると、“Chic Kimonos & Wraps”のページで、日本製の絹地や

木綿地に菊の刺繍や竹柄のプリントが施され、帯のついたキモノが紹介されている【図4】。これらには日本趣味の流行を追う顧客たちを引き付けるためだろう、それぞれ東洋的なイメージを強調するような“Shanghai”, “Mikado”, “Pitti Sing”, “Osaka”といった名前がつけられている¹²。この後、1910年代中頃にかけてキモノの取り扱い数は増加の一途を辿るが、1910年代後半になると、カタログ内でのその扱いは徐々に小さくなっていく。このことから、英国での日本製品の流行の終焉と時を同じくして、1920年代に入る頃にはキモノブームも終わりを告げたといつてよい。



【図4】“Chic Kimonos and Wraps”,
1909年 Harrods General
Catalogue ©Company Archive,
Harrods Limited.

この頃既に大手百貨店となっていた Harrods は店頭販売とあわせて通信販売も行っており、カタログからは、キモノがその両方を通じて20世紀初頭に英国全土の家庭にもたらされ、さらなる流行拡大を促進したことが推測できる。

以上のように、英国におけるキモノブームは、現地の商店・百貨店による店頭販売・通信販売の両方を駆使した大々的な販売が背景となったものであった。

2-3. 英国の美術館・博物館に現存するキモノ

それでは、英国で販売されていたキモノとは、実際はどのようなものだったのか。執筆者は、英国内の美術館・博物館での実見調査により、現在までに22点の日本製輸出用キモノ及びドレッシングガウンを確認している。これらの多くは、情報不足によりこれまで所蔵先では顧みられることのないまま収蔵庫に保管され、製作者や製作年代なども特定できないまま、詳細不明とされてきた。

輸出用キモノはそのほとんどが、本来の日本人向けの着物とは異なり、背中心がなく、両脇にマチが取られたフレアなシルエットである。さらに、袖口にタッセルがついていることも多く見られる特徴だろう。これら輸出用キモノを、刺繍入りのもの、型染めのもの、廉価品の三つに分類して、それぞれの事例を挙げておきたい。

まず刺繍入りのものは、前身頃と後身頃に花や蝶などの手刺繍が施されたもので、輸出用キモノのうち最もよく見られるタイプである。【図5】は、縮緬地に薔薇柄の手刺繍が施され、タッセルと共布のベルトが付いた、刺繍入り輸出用キモノの典型である。所蔵先である Fashion Museum（在 Bath 市）の記録では、1918年から1920年の製作で製作者は不明とされている。現在までに、英国内で同様の刺繍入りキモノを計9点確認している。日英博覧会当時は、キモノ類は「刺繍ヲ施シタルモノ最モ売行良好ナリ」との記録があることから、当時最

も人気の高かった種類だと考えられる¹³。

これに対し、型染めのものは、刺繍の代わりに、模様を染めだけで表現したものである。この種の輸出用キモノは、現在英国内で7点確認できている。【図6】は、1920年から1930年に製作された、五つ紋の縮緬地の輸出用キモノで、背中心があり、シルエットがマチのないストレートであることが輸出用キモノとしては珍しい。「S. NISHIMURA, KYOTO, JAPAN」のラベルがついていることから、友禅染の技術に定評のあった、西村總左衛門率いる現在の千總の製作であることが判明した。

一方、キモノの人气が定着した1920年代前後から、より安価なバージョンとして登場したのが、生地・縫製・刺繍などが粗雑な廉価品である。【図7】は、製作年代・製作者ともに不明であるが、透けるほど薄い粗悪な絹地に、化学染料によるプリントを施した廉価品の好例である。先行研究によれば、19世紀後半から20世紀前半にかけて、欧米で絹織物の低価格下と薄地軽量化が進み、それまで富裕層向けの贅沢品であった絹製品が、中・下層階級にまで浸透したという¹⁴。田村均氏は、このような状況が「近代に生きた人々のライフスタイル」にまで多大な影響を与えたと指摘しているが、この廉価版の登場が高級なキモノに手のでない、下層階級の人々の日常にまでキモノを浸透させることになったのである。

3. 高島屋のキモノと対英貿易

それでは、これらのキモノを、誰がどのようにして、英国にもたらしたのだろうか。当時の輸出用キモノ製作・販売の大手であった高島屋について、先行研究では、高島屋製作のキモノの現存品がいくつか紹介されている¹⁵。しかし、それらが実際にどのような経路で現地に渡り、どこで販売されていたのかについては、今のところほとんど明らかになっていない。そこで、高島屋の社史と英国側の資料とを突き合わせることで、キモノ輸出をめぐる両者のつながりを検証し、高島屋のキモノが英国にもたらされ、現地のキモノブームにおいて一定の役割を担った可能性を明らかにしたい¹⁶。



【図5】 Fashion Museum 所蔵刺繍入りキモノ
(Courtesy of the Fashion Museum, Bath & North East Somerset Council.)



【図6】 Fashion Museum 所蔵西村總左衛門製作型染めキモノ
(Courtesy of the Fashion Museum, Bath & North East Somerset Council.)



【図7】 Fashion Museum 所蔵廉価版キモノ
(Courtesy of the Fashion Museum, Bath & North East Somerset Council.)

3-1. 高島屋ロンドン出張所

1831年に創業し、1882年には早くも「外人向」商品の製作を始めていた高島屋の海外進出の時期は、英国のキモノブームと時期を同じくする。何度かの欧米視察を経て始まったリヨンでの直輸出貿易が成功し、1900年4月には「高島屋飯田新七横浜貿易店」として本格的に海外貿易事業に乗り出した高島屋は、1899年、代理店 E. Belfour（後に Belfour & Morris に改組）をたててロンドンに進出した。1913年2月22日の英国 *Financial Times* の記事によると、Belfour & Morris は Cheapside 17-18番地に事務所を構えた「絹の代理店兼商店」として「ヨーロッパと日本の絹を扱っ」ていたが、負債を抱え、同年事業整理を発表している。1907年9月15日発行の高島屋の雑誌『新衣裳』では、ロンドン出張所の住所が同じ Cheapside 17-18番地となっていることから、Belfour & Morris が高島屋の代理店であったことは間違いない。1906年になると、「倫敦に出張所を設ける事が最も緊要なり」として、この Belfour & Morris の一室を借り受けて出張所を設け、絹物と木綿類加工品の輸入事務を開始する。こうした中で、ロンドンが高島屋にとって「輸入取引の緒」というべき重要な存在になっていったことは、同年5月に、英国の登録商標を申請していることからもうかがえる【図8】。これは「高島屋取扱品が英国市場に於て既に信用を博し、品質の他店品に勝るの故を以て、名声拡大するに連れ」て、高島屋の羽二重であることを示す「塔印 (Pagoda Brand)」を付けた模造品が出回ったためであるという。英国側の資料では、1907年にこの Pagoda Brand が登録商標として許可を受けたことが確認できる【図9】。この後、「益々高島屋羽二重の品質優良なる事は、各市場の認識する所と」なったとされている。

こうして順調に業務が拡大した結果、1909年には、Wood Street 122番地に独立の店舗を構えるに至った¹⁷。London Directory を見ると、初めて Iida & Co.（高島屋の海外での社名）の名前が現れるのは1911年のことで、その後1941年まで継続して掲載されている¹⁸。掲載当初は、Japanese merchants と紹介されたが¹⁹、後には、Japanese importers (silks & c.) & exporters に変更され、その業務内容が日本の絹製品などの英国への輸入と日本への英国製品の輸出であったことが明らかにされている。

1909年2月8日の英国 *Daily Express* には、ロンドンの Maple 商會が新しく開設した「日本美術部門」にて取り扱う商品の紹介があり、そのうちの一つとして「著名なアーティストである Iida Takashimaya による、素晴らしい雰囲気シルク刺繍のパネル、カットシルクベルベットの絵」が挙げられている。お



【図8】高島屋英国登録商標（『式拾周年記念高島屋飯田株式会社』、高島屋史料館所蔵）



【図9】英国登録商標一覧における高島屋登録商標
(Drapers' Record, 1907年1月12日) ©The British Library Board (LON LD167)

という記録がある¹⁹。博覧会での宣伝効果は大きく、自社製品の英国での販路拡大にとって、この参加は大きな意味があったと言えるだろう。

このように着実な成果を生んでいた高島屋の海外貿易事業であったが、キモノ販売に関して現地の販売店との間ではどのような形で取引があったのかを次に詳しく見ていきたい。

3-2. 「外人向着物」と輸出カタログについて

現在、高島屋史料館には、1911年製作とされる『外人向着物図案』という手彩色の輸出用キモノ図案集が残されており、廣田孝氏によってその図案のパターン分析が行われている²⁰。このうちの一枚で、薄緑の地につばめとあやめのモチーフのものには、「シングルトン商会注文」との書き込みがある【図10】。廣田氏は、「この書き込みによって、この柄のキモノが制作されて輸出されたものと考えて問題ない」と述べているが、「シングルトン商会」についてはこれまで未調査とされてきた。「外人向着物」がどこへ輸出されたのか、実際に現地で販売された可能性があるのか、「シングルトン商会」について明らかにすることは、その手がかりを与えてくれるだろう。まず、「シングルトン商会」は、先にも触れたが、日本側の資料で「日本雑貨輸入商」として紹介されている、Singleton Benda & Co., Ltd. のことと見て間違いなさだろう²¹。所在地は、ロンドンの London Wall, 27番地となっているが、これは前述の *London Directory* の登録と一致する。また、*Japan Directory* には、Harima-machi 52番地にも店舗を構えていたと記載されており、日英両国の店舗間で、直輸出を



【図10】『外人向着物図案』シングルトン商会注文のデザイン（高島屋資料館所蔵）

行っていた可能性が非常に高い。1907年7月10日の 英国 *Financial Times* では、Singleton Benda 商会の Benda 氏の、1906年12月から翌年6月にかけての訪日が報告されている。そしてその訪問中に、象牙細工、金蒔絵、駒井の金属工芸などを含むまとまった量の日本の品が購入され、英国へ出荷されたという。また、*Drapers' Record* 掲載の同社広告では、Japanese Kimonos の取り扱いが宣伝されている【図11】。これらのことから考えて、高島屋の「外人向着物」が Singleton Benda 商会によって日本から英国にもたらされ、英国で販売された可能性は非常に高く、これを高島屋製作キモノの輸出・販売経路の一つとして指摘することができるだろう。

当時、高島屋は、椅子とテーブルを備えた西洋風の外国人客向け店舗を持っており、写真を見るとその店舗内に「外人向着物」の現物がディスプレイされているのが確認できる。外国人商人や観光客はこの店舗を訪れて現物を見ながら商談を行っていたのだろう。さらに、高島屋横浜貿易店からは、1911年12月に英文輸出カタログ *Novelties in Japanese Articles* が発行されている²²。本カタログには、様々な種類のキモノが掲載されており、絹地か綿地か、刺繍入りかプリント地か、丈がフルかショートか4分の3か、裏地付きかどうかといったような違いによって、値段は85銭から40円以上までと幅広い（現在の価値にしておよそ1000円から45000円程度）²³。さらに、「マンガリンコート」という中国風デザインのキモノも含まれており、当時の欧米でしばしば日本と中国が混同されていたことを逆手に取った販売戦略があったことがうかがえる。同様の戦略は、陶磁器など、明治期のその他の輸出工芸でも取られていた。1904年の高島屋の雑誌『新衣裳』を見ると、彼らがキモノの流行に関する現地の最新情報に通じていたことがわかる。



【図11】 Singleton Benda 商会広告
(*Drapers' Record*, 1909年9月
18日) ©The British Library
Board (LON LD167)

此「キモノ」の輸出は三四年前よりメッキリ盛大になって来たのであるが（中略）コンナ有様であったので本年の流行には日本女服の一部分を洋服に適用することとなって差詰め袖を大きくしたのである、衣服の形に於て既に日本服の一部を採用することとなったので之が材料も亦日本風の絹を用いねば自然日本服の優美な味（テースト）が伝らぬと云ふので従つて是迄余り用いなかった縮緬類を用ゆることになった是全く日本女服の勢力に感化された一端であると断言して宜しかろうと思ふ²⁴

この記述から、高島屋は、キモノの流行がキモノ風衣装の流行を引き起こしたこと、それが

自身の主力輸出品である絹織物の需要につながっていることを認識しており、非常に自覚的なビジネスを展開していたと言えるだろう。

以上のように、キモノは当時の高島屋の重要な輸出品の一つとして精力的に、そして戦略的に販売されていた。そしてそれらは、店舗やカタログを通じて注文した英国側業者によって現地で販売され、英国のキモノブームを支えていたと考えられる。

4. キモノの色彩をめぐる日英交渉

冒頭で述べたように、19世紀後半から欧米の画家たちの日本趣味の作品では、キモノを着た女性がしばしば描かれてきた。それに対して、ここまで明らかにしてきたような20世紀初頭のキモノブームの中で一般の女性たちに実際に着用されていたキモノには、どのような特徴があったのだろうか。

非常に上品で着心地のよい、最新の刺繍入りキモノが入荷しております。(中略)これらは、この国での使用に合わせた特別のサイズと色調(執筆者注:shades)で作られています²⁵。

この記述が示すように、キモノの色というものがサイズ同様に重要視され、英国では本来の日本の着物とは違った色調が求められていた。

前述の高島屋『外人向着物図案』には、131着の着物図案が収録されている。すでに述べた通り、それらは実際に製作されて、英国業者を通じ、英国内で販売された可能性が非常に高い。この131着について、色という観点から整理してみると、どのような傾向があるのだろうか。本稿では、分析のため便宜的に、キモノの色を明暗関係と濃淡関係を基準とした三つのカテゴリーに分類する²⁶。第一カテゴリーは、赤や橙のような、明るく鮮やかで濃い色、第二カテゴリーは、黒や紺色のような、暗くくすんだ濃い色、第三カテゴリーは、パステルカラーやパールカラーのような、明るく淡い色とする。以下の表は、131着をこれらのカテゴリーで区分したものである。

カテゴリー	代表色	総数
第一	緋色／黄緑／橙	12
第二	黒／鼠色／青／濃紫	17
第三	白／薄紫／薄桃／パールカラー一般	93

(着色なし、あるいは濃淡二色使いのもの9点を除く)

一見してわかる通り、第三カテゴリーの色が圧倒的に多く、図案の大部分を占めていることから、これらの色選びがランダムに行われたのではないことが想像できる。

ところで、同時代の日本ではどのような色が女性の着物に使われていたのだろうか。城一夫によれば、明治中期には「梅紫、草色、紫紺鼠、藤鼠、お召鼠、小豆紫」が好まれ、日清・日露戦中には「新勝色や紫紺、江戸紫などの青紫系」が流行したという²⁷。また、明治後半も鼠色の流行は続いたが、化学染料の発達により「牡丹色、琥珀色、退紅色、肉色、洗朱などの赤、黄赤系の明るい色」も流行した。これらの色の中で、第三カテゴリーに属する色は退紅色のみで、あとはほぼ第二カテゴリーの色である。また、城によれば、日本でパステルトーンが流行色となるのは、1960年代を待たなければならない。このことから、高島屋『外人向着物図案』の色選びが、海外を意識したものであったことが推察できる。

とはいえ、この色選びは高島屋に固有のものではなかった。1913年6月16日にロンドンのGlendining 商会の開催で行われたオークションでは、“Japanese Embroidered Kimono, & c.”として、実に179着ものキモノが出品された。カタログには実際出品されるキモノの写真やイラストはないものの、いくつかの例外を除いて、ほとんどに色と柄の説明がある。この場合、言葉による説明から推測することしかできないため、実際の色との間に乖離がある可能性は否定できない²⁸。しかしながら、例えば同じ“cerise”でも“cerise”と“pale cerise”が区別されていることから、とりわけ色の濃淡には特別な注意が払われていたと考えてよく、上で用いた三つのカテゴリーの分類を用いることは問題がないと思われる。

カテゴリー	代表色	総数
第一	Scarlet / Green	19
第二	Black / Grey / Blue	52
第三	White / Pale Blue / Pale Pink	97

(地色の記載なしのもの11点を除く)

先の高島屋『外人向着物図案』のものと比率は異なるものの、やはり第三カテゴリーの色が圧倒的に優位にあることには変わりがない。第一カテゴリーに属する色のキモノが敬遠されていたことも明らかである。

それでは、なぜこのような色が選ばれるようになったのだろうか。そのヒントを、*Drapers' Record* の1909年2月13日の記事“Jap Gowns and Jackets”に見ることができる。

わたしは、日本製のドレッシングガウンとドレッシングジャケットの取引について、いくつか要求を行なってきた。(中略)すでに世間に浸透した「無難な」形はそのままに、

もっと控えめな（執筆者注：subdued）色味が求められるだろう。すでに結ばれた来秋の契約では、これらの色調が選ばれている。

この記述は、1909年の時点で、英国業者の間で日本から輸入する室内着の色は“subdued”，つまりもっと薄い色であるべきだという声が出ていたことを示している。言い換えれば、それまでの色は、英国人には濃すぎる、派手すぎるものだったということであろう。先の高島屋『外人向着物図案』は1911年作成とされていることから、あのように薄い色が大部分を占めていたのは、英国側の要請を反映した結果であったと考えることができる。

それでは、なぜ薄い色が求められたのだろうか？ 一つの可能性として、英国ではキモノが室内着として用いられたこととの関連が挙げられる。20世紀に入り、エドワード7世の統治下となった英国では、室内装飾も、後期ヴィクトリア朝の重厚なものに代わって、よりシンプルで控えめなものが選ばれるようになった。同時に、壁紙や塗装には、暗い色に代わって、明るく淡い色が好んで使われるようになる²⁹。「20世紀の最初の数年までに、居間と寝室はより淡く、明るく（執筆者注：lighter and brighter）なった」とK. Arberは述べている。このことから考えると、室内着であるキモノやドレッシングガウンに薄い色が求められたのは、エドワード朝の明るく柔らかな室内の雰囲気に合わせていたためだったのではないだろうか。欧米の画家たちが描いたキモノも室内着として描かれたものではあったが、金田由紀子氏も指摘するように「本来の日本のきもの」を意識して用いられたそれらと、実際の消費の主体である一般の女性が求めたキモノとは違っていた³⁰。このように、流通・消費という観点から検証してみると、表象の問題を中心とした従来のジャポニスム研究で論じられてきた19世紀のキモノとは全く違った、20世紀の新たなジャポニスムにおけるキモノのあり方が見えてくる。

以上のことを踏まえて、現存するキモノの製作年代を色によって特定する方法を提案したい。現在英国内の美術館や博物館に所蔵されているキモノに関しては、非常に情報が少なく、製作年代の特定が進んでいない。そこで、シルエットや製作技法、同時代の販売カタログなどの判断材料に加えて色を参考にすることで、それらが、薄い色への要請が出る1909年以前の製作か以降の製作かを、ある程度絞り込むことが可能になると考えられる。この方法は、今後現存品の年代特定を進めるにあたって、有益なものとなるだろう。

5. まとめ

20世紀初頭の英国では、キモノが専門店や百貨店など至る所で販売され、一般に広く浸透していた。その裏にあったのは、高島屋のような、日本製品の売り込みに尽力した日本側業者の存在である。彼らにとって、キモノは徹頭徹尾海外に「受ける」ことを目的とした「売る」

ためのものであり、そのために、英国側の需要に合わせてキモノに淡色を採用するなどの戦略をとった。それらを、英国側業者が外国人専用店舗や輸出用カタログを通して注文し、現地の店舗で販売した。英国のキモノブームは、流通・消費の観点から見ると、決して偶然の流行現象ではなく、そこに商機を見出した日本側業者と、それらを広く販売した英国側業者の双方によって必然的に引き起こされた、相互交渉の賜物であったといえることができるだろう³¹。

註

- 1 本稿は、日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」の大阪大学「アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究 ― 日英間に広がる21世紀の地平 ―」の助成を受けて2012年度に行った調査を元にしたものであり、記して謝したい。投稿にあたっては、同研究プロジェクト報告書に執筆した内容を全面的に改稿したが、資料などの点で一部重複する箇所があることをお断りしておく。また、本稿では、輸出用に製作されたものはカタカナでキモノ、従来日本国内で日本人が着用してきたものは漢字で着物と表記する。
- 2 深井晃子『ジャポニスムインファッション 海を渡ったキモノ』（平凡社、1994）
- 3 米今由希子「19世紀後半のイギリスのジャポニスム ― 雑誌にみる日本の紹介と服飾 ―」（『国際服飾学会誌』（28）、2005）、佐々井啓「19世紀イギリスの日本趣味 ― ティー・ガウンと子どもファッション・ドレスを中心に ―」（『日本家政学会誌』61（4）、2010）、Elizabeth Kramer “From Specimen to Scrap: Japanese kimono and textiles in the British Victorian Interior, 1875-1900,” *Material Cultures in Britain, 1740-1920*, ed. John Potvin and Alla Myzelev. Ashgate, 2009. など。
- 4 周防珠実「1880-1910年代のイギリスにおける日本製室内着 ― リバティ商会の通信販売カタログを手がかりとして」（『DRESSSTUDY』51, 2007）
- 5 岩田和男「むかし、ムスメ小説があった ― 『蝶々夫人』と日本女性のイメージ」（佐々木英昭編『異文化への視線：新しい比較文学のために』名古屋大学出版会、1996）、満谷マーガレット「ムスメたちの系譜 ― 西洋人の見た日本女性」（川本皓嗣編『美女の図像学』思文閣出版、1994）、橋本順光「茶屋の天使 ― 英国世紀末のオペレッタ『ゲイシャ』（1896）とその歴史的文脈」（『ジャポニスム研究』（23）、2003）ほか。
- 6 『林忠正 ― ジャポニスムと文化交流』（ブリュッケ、2007）、『第2回畠山公開シンポジウム「アメリカのジャポニスム ― 日米文化交流の歩みと知られざる偉人・執行弘道 ―」報告書』（ジャポニスム学会、2013）、山本真紗子『唐物屋から美術商へ ― 京都における美術市場を中心に』（晃洋書房、2010）、朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ ― 東洋の至宝を欧米に売った美術商』（新潮社、2011）など。
- 7 桜井鷗村『欧州見物』、田中湄人『最新倫敦繁盛記』より。橋本順光「日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行」（『阪大比較文学』（7）、阪大比較文学会、2013）の注65の指摘を参照した。

- 8 それぞれ1909年3月13日、同年9月18日、1910年3月5日、同年5月7日に掲載の広告。
- 9 *Drapers' Record*, 1909年4月17日
- 10 1976年に House of Fraser に吸収され、2005年まで同名で営業。
- 11 周防前掲論によれば、Liberty 商会では19世紀にドレッシングガウン、20世紀にキモノが販売されたという。
- 12 “Pitti Sing” はオペレッタ *Mikado* の登場人物の一人。
- 13 日英博覧会出品協会残務係『日英博覧会出品協会事務報告』, 1911
- 14 田村均「19世紀末-20世紀初頭・国際市場における絹織物の低価格化と流行品——『欧米染織鑑』に収録された織物サンプルの分析」(『埼玉大学教育学部紀要』56, 2007), 橋野知子『経済発展と産地・市場・制度——明治期絹織物業の進化とダイナミズム』(ミネルヴァ書房, 2007) など。
- 15 先述の西村總左衛門や、三越などもキモノの製作・輸出をしていたが、現存する資料の量とアクセスの問題から、本稿では高島屋を中心に上げたい。加藤明子(編)『もてなす悦び展——ジャポニスムのうつわで愉しむお茶会図録』(三菱一号館美術館, 2011), Richard, M., & Harold, K. *Orientalism: visions of the east in Western dress*. New York: The Metropolitan Museum of Art. 1995などに、高島屋製作のキモノの現存品が紹介されている。また近年、英国 Ashmolean Museum の Threads of Silk and Gold: Ornamental Textiles from Meiji Japan 展や、世田谷美術館の「暮らしと美術と高島屋展」が開催され、高島屋の輸出品製作が紹介され始めている。
- 16 高島屋飯田株式会社『式拾周年記念高島屋飯田株式会社』(高島屋飯田株式会社, 1936)。これ以降、特に断りが無い限り、社史の情報は全てここからとする。
- 17 社史では、1910年に Belfour & Morris が事業整理を発表したことで高島屋が独立したとする記述もあるが、*Financial Times* の記述とは食い違う。
- 18 社史では、ロンドン出張所は有限会社であることを示す Iida & Co., Ltd. となっているが、英国側の資料では Ltd. の記載はなく、英国の有限会社一覧の資料でも確認できないため、有限会社ではなかった可能性が高い。
- 19 前掲『日英博覧会出品協会事務報告』より。「大日本外国貿易年表」によると、日英博覧会開催の1910年における「絹製寝衣」の英国への輸出量は、1902年から1920年の間で最大となる424326枚を記録している。
- 20 廣田孝「明治末大正初期の輸出用キモノに関する一考察——高島屋史料を中心に——」(『服飾美学』(42), 2006)
- 21 ドーグラス エム・ヤング『邦文英人貿易名鑑 JAPANESE REGISTER OF BRITISH TRADES』(合名会社東洋広告取次会社, 1913)
- 22 このカタログは当時500部発行されたとされ、「専ら東洋方面の卸売得意先に配布シ通信販売取引ヲ促シタリ」との竹田亮之助による一筆が添えられている。
- 23 企業物価戦前基準指数(1911年=0.610)を元に計算。
- 24 ひげ男「西洋に於ける日本女服の流行」(『新衣裳』, 1904年10月1日)

- 25 “The Buyer’s Guide” (*Drapers’ Record*, 1909年9月18日) のシングルトン商会広告より。
- 26 本稿で論じる輸出用キモノの色について、本来であれば色の三属性を用いて論じるべきところであるが、当時問われたのが端的に濃淡の問題であったと考えられるため、ここでは単純に明暗関係・濃淡関係を元にした独自の категория で議論したい。
- 27 城一夫, 渡辺直樹『日本のファッション 明治・大正・昭和・平成』(青幻舎, 2007)
- 28 可能な限り, British Colour Council, *The British Colour Council dictionary of colour for interior decoration*. London. 1949を参考に, 実際の色の特定に努めた。
- 29 K. Arber, *Turn of the Century Style: Home Decoration and Furnishings between 1890 and 1910*. Middlesex University Press. 2003, H. Mandleberg, *Edwardian House Style: An Architectural and Interior Design Source Book*. Devon: David & Charles. 1994など。
- 30 金田由紀子「ニューヨークのジャポニスム ― ジョン・スローン《屋上の赤いキモノ》―」(前掲ジャポニスム学会報告書, 2013)
- 31 陶磁器など他の輸出工芸品と比較した, 高島屋のキモノ輸出の独自性については今後の課題としたい。

【付記】資料の調査と図版の掲載にあたっては, 高島屋資料館, Harrods Company Archive, Fashion Museum, British Library News Papers よりご高配を賜りました。また, 京都女子大学の廣田孝先生より貴重なお助言を頂戴しました。末筆ながら心よりお礼申し上げます。

